



3



1



2

# SAVE THE EARTH

地球のために今できること

12

## 住まいは命を育む「第3の皮膚」

CO<sub>2</sub>の排出量を削減するための「太陽光発電」や「エコポイント制度」など、今「省エネ」が声高に叫ばれている。

もちろん「省エネ」は大切だ。しかし「省エネ」は目的ではなく手段だったのではないだろうか?

健康で人間味あふれる住まいを取り戻す、という大きな目的のため。

取材・文／酒井 新 写真提供／石川恒夫

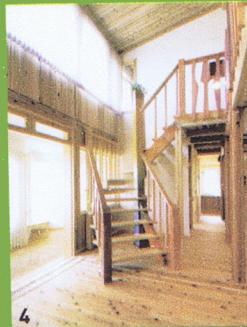
太陽光発電設備を設けると、発電能力1キロワットあたり7万円の補助が受けられる制度が09年4月に始まった。また、冷蔵庫、エアコン、TVで省エネ性能の高い製品の購入に「エコポイント」がつき、それがさまざまな商品やサービスと交換できるという制度も始まった。「エコポイント」対象外の家電製品についても、各メーカーは「CO<sub>2</sub>の排出を〇%削減」といった性能を盛んにアピールしている。確かに太陽光の活用は重要だし、できるだけCO<sub>2</sub>排出の少ない製品を使いたいと思う。しかし、CO<sub>2</sub>排出量という数値ばかりが取りあげられる現在の「省エネ」や「地球環境保護」でいいのか。前橋工科大学の石川恒夫さんは、もつと根本的な問題があると指摘する。「そもそも省エネがいわれるようになつたのは、文明や産業の進歩の名のもとに人間が環境を破壊し、地球と私たち自身の生命が脅かされるようになつたからです。住まいという身近な環境においても『シックハウス症候群』など、住まいによつて人間が健康を害するという問題が起きています。省エネは、この環境と人間の敵対的な関係を解決するためのひとつ手段。建築においても、解決しなければならないのは、住まいが生命を育む場所になつていいという問題なのであり、CO<sub>2</sub>排出量の何%を削減するといったことではありません」

1 住まい手の好きなモッコウバラの壁面緑化で彩られた「吉岡の家」の玄関。バラの黄色と緑の葉、赤に塗られた柱が調和している。2 軒の出が迫り出すにつれて、方杖の傾斜がかわる「橘恋の別荘」。アウトドアの時間を楽しく過ごすために考案された。3 「軽井沢の邸」の北側 外観。緩やかに弧を描く外壁には厚さ15mmの杉板を使い自然塗料で仕上げた。(1～6の写真は、すべてビオ・ハウス・ジャパンの仕事から)



**Profile 石川恒夫**

早稲田大学大学院修了。訳書に『健康な住まいへの道』(ホルガー・ケーニッヒ著)、著書に『バウビオロギー』(監修)などがある。現在、日本バウビオロギー研究会理事。前橋工科大学大学院准教授。ビオ・ハウス・ジャパン一級建築士事務所代表取締役。



4



5



6

# SAVE THE EARTH

そもそも住宅は「第3の皮膚」であり「巣」だと石川さんは強調する。

「第1の皮膚はからだ。第2の皮膚は衣服。住まいは第3の皮膚です。第1の皮膚が食に、第2の皮膚が衣に、第3の皮膚が住にそれぞれ対応するといえるでしょう。人間は今、生活の90%を室内で過ごしますが、そこが動物にとっての巣のように生命を育み、守っているかといえば、むしろ逆ではないでしょうか。経済優先の意識は大量の

工業製品を生み出し、私たちの居住環境は未知の化学物質によって取り囲まっています。ホルムアルデヒドなど一部は規制されましたが、その他の VOCは野放しです。食の安全と同様に、建材における成分表示が今こそ問われています」

そこで石川さんがその必要性を強く指摘するのが「バウビオロジー (Bau biologie)」の視点だ。「バウビオロジー」は、建築(bau)と生命(bio)

と学問(ロゴス)からなるドイツ語の造語。ドイツのアントン・シュナイダ一氏が中心となって提唱したもので『住環境と人間の全体的諸関係についての学』と定義されている。

「『バウビオロジー』は、住まいを『生活のパートナー』ととらえます。デザインや美学的な視点にとどまらず、生物学的な視点を重視し、肉体と魂と精神をもつた人間という生物が、そこでいかに元気に暮らせるか、と考えるのです。たとえば、確かに蛍光灯の消費電力は少ない。しかし人体への影響や、廃棄時の水銀の問題などはどうなのか。仕上げに使う素材の質感や色なども人の心理には大きな影響を及ぼします。しかしこれらは省エネといった視点では見えてきません」

生物としての人間を中心据え、住環境を総合的に考える「バウビオロジー」。それは今、もっと注目されなければならぬ考え方ではないだろうか。

4 「吉岡の家」。石川さんが考案するBSパネル(釘打ち集積パネル)を壁と天井に使った。バウビオロジーとエコロジーの要求を満たすすぐれもの。階段の色彩が人の動きの伴奏となる。5 「千が滝の家」。落ちていた空間をつくるため、自然光・照明・色彩のバランスにも配慮した。6 「赤堀の家」。大きな開口部は戸を引き込むことで内外が一体になる。すべて無垢材で仕上げたすがすがしい空間。